

「聴衆のおかげ」再認識

旅と永遠の別れから

先週まで宮崎国際音楽祭に出演するため10日ほど南国・宮崎にいたと思ったら、今週は仙台国際音楽コンクールの指揮で東北にいる。さすらいの旅を続けながら、地域の人たちに音楽の素晴らしさを届ける喜びをかみしめている。

9月から、深く関わることになるオーケストラ・アンサンブル金沢（OEK）の活動では、素敵な金沢の街で、人生という長い旅の集大成となる仕事に取り組みたいと強く願っている。私が珍しく真面目に、指揮者としての原点に立ち返っているのは、この春、つらい別れが多かったからかもしれない。昨年、高校の大先輩で恩師である尾高惇忠先生を失い、はや1年と思っていた時のことである。

明るく毒づく母

4月末に逝った母親は96歳の大往生だった。母は、不肖の一人息子がよほど心配だったのか、口を開けば「こら、じゅんいちー！」って私を毒づいてばかり。明るい人だったが、私が幼い頃から、母は素直に私を褒めることができない気質で、何

さすらいマエストロ

広上 淳一

の独り言



④

ひろかみ・じゅんいち 1958年東京生まれ。東京音大卒。26歳でコンドラシン国際青年指揮者コンクール優勝。欧米各地のオーケストラで客演し、米コロンバス交響楽団音楽監督、京都市交響楽団常任指揮者などを歴任。2015年サントリー音楽賞。22年9月、オーケストラ・アンサンブル金沢（OEK）のアーティスティック・リーダーに就く。東京音大指揮科教授。両親は富山市出身。

かにつけてネガティブな言葉でまくし立ててくる。今思えば、そんな堅物の母に

抗うように、努めてポジティブに振る舞おうとした日々が、楽天的な私を形成したのだろうか（笑）

札幌で仕事をしている時に一度「母危篤」の知らせがあったが持ち直し、札幌から次の宮崎へ行く間のタイミングで息を引き取った。天国から「ちゃんとお葬式挙げなさいよ」と母の声が聞こえてくるようで、その務めを果たせた。最後の最後まで、たいした母だったなと思う。これまで10年以上、一緒に暮らしてきたわが家の愛するウサギとインコも死んだ。ペットも

大事な命に変わらない。家族は日課だった世話を今でもつい、やりそうになる。日常にぽっかり穴が空いたように感じている。

そして今月に入り、いわば私の上司であり、大変お世話になった東京音楽大学学長で国際的なピアニストでもある野島稔先生が他界した。かけがえのない身近な存在を、これだけ短期

間に相次ぎ失ったショックは大きく、正直言って心が折れそうになった。それでも日々の公演は続く。お年寄りから若者、子供まで幅広い世代がホールに集ってくれる。私にできることは、懸命に指揮棒を振り、最高と信じる音楽を届けるだけだ。そう考え、音色の先にあるお客さまの顔を見ていると、勇気づけられるものがあつた。

やっぱり、私の仕事は聴きに来てくれるお客さまあってのもの。仮に私や楽団がどんなに練習して良い演奏をしても、お客さまがいなければ全て「空振り」に終わる。単純なことだけど、演奏に耳を傾けてくれる方々がいるおかげで私の仕事が成り立っていることを再認識した。

音楽に求められる力

命の大切さということはいえ、ウクライナで起きている悲劇に胸が締め付けられている。人間は素晴らしい音楽や芸術文化を生み出してきた一方で戦争をなぜ繰り返してしまつのか。理想論と笑われるだろうが、何としても争いの引き金を引く前の、ギリギリのところで抑える力が音楽に求められている。欧州が生んだキラ星のような作曲家たちの曲にそんな力が宿ってほしい、と祈りながら演奏している。

前回の続きで、指揮者になるため目の色が変わった高校時代のことを紹介しようと思っていたら、やや脱線したようだ。前途多難な高校生活は次回語ろう。